

青年海外協力隊と キャパシティ・ディベロップメント

細野昭雄

(JICA研究所; 2018年6月25日)

JOCVとキャパシティ・ディベロップメント(CD)

- CDとは、途上国の課題対処能力が、個人、組織、社会などの複数のレベルの総体として向上していくプロセス (OECD/DACの定義)
- JICA では2000年代半ば技術協力は途上国のCDを支援する者と整理された。この議論は協力隊員にも適用される。(第2章、p.47)
- JOCV と専門家との相違点：(1) 専門家は事前に定められたPDM等に基づく協力であるのに対し、JOCVは柔軟に、一般的に自らの判断で協力を行うことや、(2) 協力隊は、通常、日々生活を共にし、学びあい、協働で課題に取り組むアプローチで、CDのための協力を行うことなどが指摘できる。(第4章、pp.111-112)

‘Learning’ (Stiglitz and Greenwald)と Capacity Development

- Stiglitz and Greenwald. 2014. *Creating a Learning Society: A New Approach to Growth, Development, and Social Progress*. New York: Columbia University Press (『スティグリッツのラーニング・ソサエティ: 生産性を上昇させる社会』2017年、東洋経済新報社)
- 経済発展の源泉が技術進歩であることはよく知られている。しかし、新しい技術が開発されたからと言って、そのまま豊かさにつながるわけではない。人々の生活水準が向上するには、技術をより効率的に使いこなすための「ラーニング」が必要となる。

Determinants of learning : Comparison with CD (preliminary)

- Stiglitz and Greenwald (2014, 56-57) identified the major determinants of learning:
- (1) Learning capabilities; (learning to learn)(CD: Core capacity)
- (2) access to knowledge; (CD: 'Co-creation of knowledge' model which is endogenous, in stead of transfer of knowledge model)
- (3) the catalysts for learning; (CD: Catalysts' support)
- (4) creating a creative mind-set—the right cognitive frames;
- (5) contacts—people with whom one interacts—who can catalyze learning, help create the right cognitive frame, and provide crucial inputs into the learning process; (CD: Mutual learning), and
- (6) the context of learning. (Context of CD)
- “Just as *knowledge* itself is endogenous, so is the ability to *learn*” (Stiglitz and Greenwald 2014)

SDGs, CD, 協力隊

- SDGs に関する政府間交渉の基本文書の一つであった国連事務総長統合報告書 “The Road to Dignity by 2030” は、目標達成に向けた実施手段の1つに「キャパシティ強化への投資」を挙げ、ボランティアの役割に言及している:「私たちがキャパシティ強化を進めて新開発課題の定着支援に努める中、ボランティア活動はもう一つの強力で課題横断的な実施手段となりうる。ボランティア活動は地域の活動主体の増員を助け、国別のSDGs 達成の取り組みに関する計画立案と実施に向けて、人々の参加を促進することが出来る。(第2章、p.56)

事例研究：3つの事例から見た JOCVによるCDへの貢献

- 第4章では、3つの事例につき、CDプロセスへの協力隊の貢献について研究：
- 中米算数プロジェクトによる「考える」教育への貢献
- マヤ・ブルーとジャパン・ブルーの出会い：愛の文化の復興への貢献
- チャルチュアパ遺跡の発掘・保存と考古学の発展、マヤ文化観光への貢献
- 以下では、中米算数プロジェクトに事例について紹介（西方氏の著書と本書籍第4章から）

中米算数：協力隊による貢献とその要因

- 協力隊の活動を体系化することによって、後任がゼロから活動を計画せずに**前任の仕事の上に積み重ねていける仕組み**を考えた(ホンジュラスの協力隊事業で戦略的投入を実施したのは、1989年)(**西方2017『中米の子どもたちに算数・数学の学力向上を：教科書開発を通じた国際協力30年の軌跡』**、p.38, p.41)
- グアテマラでは、教科書編纂は協力隊員によって行われた：1990年、JOCV シニア隊員の派遣(1990)、続いて協力隊員の集中的派遣、2004年、**協力隊チーム派遣**として正式にグアテマラ教育省との間での合意文書に基づく協力へ(p.149-150) 協力隊のチーム派遣により、2006年までに、「グアテマティカ」教科書の原型が1-4年生分まで完成(西方2017p.159)

グアテマラにおける協力隊の戦略

- 協力隊の戦略(1)「支援する者、支援される者」の関係の脱却:「授業をする側と助言する側」の関係から、「(協力隊が作成した)教材を試用している教員と、その教材を評価される側(隊員)」という**新たな関係を構築する(CD: Co-creation)**(西方2017 p.154-155)
- 協力隊の戦略(2)教材の有効性を子どもの学習到達度向上のテスト結果で内外に示す:**実証データ**を示せたことは非常に重要で、その後のパイロット校**教員のより高いコミットメントを引き出すとともに、教材の普及に大きく貢献**。この調査結果が教育省を動かし、**国定教科書として印刷・全国配布**することを決定させる引き金となった(西方2017 p.156)。「グアテマティカ」として**結実 (CD: Catalyst)**



100ごとのまとまりで数をとらえることを学ぶ子供たち
(現地の先生の授業中に理解度を確認する)

中米算数プロジェクトにおけるCD

- 技プロによって編纂、制作された教科書、練習帳と指導要領の全国配布もそれに続き、重要なドライバーとなった。これらは、全国規模での教育の質の向上に向けたCDを大きく推進する役割を果たし、また、これらが、現場レベルの個人・組織（個々の教員、その所属する学校など）のCDを容易にするコンテクストとなった。
- しかし、これだけでは、現場レベルでのCDプロセスは、十分に進まなかったであろう。それを可能にしたのは、チーム派遣による協力隊員であった。すなわち、課題の認識、課題に取り組んでいく意欲、コミットメントがCDの基礎と位置付けられているが、教員研修とならんで、派遣された協力隊との交流が教員の認識を高め、動機を強めるうえで、重要であったと考えられる。かつ、現場レベルで、協力隊員と教員との相互の学びあいや、手を携えて課題に取り組み、新たな解決方法を見出していく活動を行ったことも、CDプロセスにおいて重要であった。